



「KOMABA DAY」は月に一度実施している日で、世界で起こっている様々な問題に子どもたちが触れる機会を作っています。また、同日は募金箱も設置します。集まった募金は災害などの緊急支援や KOMABA の開校以来、その活動を応援し続けているトータルペインター・ミヤザキ ケンスケさんのプロジェクト OVER THE WALL に役立てられます。なお楽しみながらの活動を目指しているため、「KOMABA DAY」では講師は私服で授業をし、生徒は授業中の飲食を可としています。

「未曾有の天災」トンガ海底火山噴火

小さな島に大きな被害

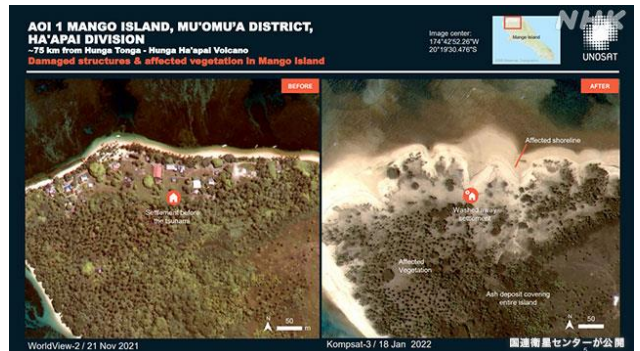
南太平洋の島国トンガで海底火山が噴火し、国民の約 8 割が被災するなど「未曾有の天災」（トンガ政府）に見舞われた。当初つかめなかった被害の状況が次第に明らかになり、各国からは水や衛生用品など救援物資が届き、電気などライフラインも徐々に復旧。国は落ち着きを取り戻し始めている。

「雨が降るのを祈っている」。火山から約 65 キロ南方にある首都ヌクアロファのラジオ局記者マリアン・クブさん（40）は、樹木や車、道路など街中に降り注いだ火山灰の清掃に追われる住民らの気持ちを冗談交りに話した。街には青空が戻り、火山は小康状態だという。クブさんは「サイクロンは多く経験したが、サイクロンよりも恐ろしかった」と噴火当時を振り返った。体験をフェイスブックなどに投稿し、復興に取り組む被災地の現状を世界に伝えている。最大 15メートルに達した津波が残した爪痕も大きい。

トンガの人口は 10 万人余りだが OCHA (国際連合人道問題調整事務所)によれば、被災者は約 8 万 4 0 0 0 人に達した。また、トンガなど太平洋の島国は、津波だけでなく気候変動に伴う海面上昇で水没の危機にもひんしている。30 年前に海面上昇の調査を現地で行った茨城大の三村信男前学長（地球環境工学）は当時、1メートルの海面上昇と 2.8メートルの高潮が重なって 3.8メートルの氾濫が起きた場合、ヌクアロファがある本島のトンガタブ島の 14% に影響が及ぶと推計していた。津波を「海の洪水」と表現し、ゆっくりと起きる水没との違いに言及しながらも「トンガが（海からの）被害を受けやすい地理的特徴」があると指摘している。



大規模な噴火が起きた海底火山「フンガ・トンガ フンガ・ハアパイ」は、日本からおよそ 8000 キロ離れた南太平洋のトンガの首都ヌクアロファから北に 65 キロ。



【海底火山から東に 75 キロほどのマンゴー島
（上の写真の地図の③）】

この島では、島の北部の海岸沿いに住宅などが集まっていますが、噴火後、建物はすべて津波によって押し流され、何もなくなっているように見えます。

今回の海底火山の噴火に伴い、日本では 5 年ぶりに津波警報が発表され、米国、ニュージーランド、カナダなど太平洋の近隣国家でも津波注意報が出されました。私はこの災害が報道されたとき、トンガの被害状況が心配で世界中のニュース記事やメディアの放送を見ていました。しかし、被害によってインターネットも繋がらずトンガの被害状況はしばらくの間、不明のままでした。災害はいつどこで起きるか全くわからないものであり、災害が起きると非常に不安な気持ちになるものであると改めて感じました。日本から 8000 キロ離れた場所の噴火が、日本に影響を及ぼすこともあります。災害を他国の出来事と考えず、防災のために普段できることを今一度考えてみましょう。

（依藤）